

米国の青少年の薬物使用の現状

－Monitoring the Future (MTF) 2021 年の最新報告より－

ミシガン大学社会科学研究所による Monitoring the Future (MTF) は、現在 47 年目のデータ収集を完了しており、米国の青少年、大学生、ヤングアダルト、および 60 歳までの成人による合法および違法な精神活性薬の使用傾向に関する有効な情報の科学的情報源として最も信頼されているものの 1 つとなっている。過去 40 年間、この研究は、青少年および成人の集団におけるそのような物質使用（薬物乱用）の増加傾向を追跡し、報告してきた。毎年恒例の MTF シリーズのモノグラフは、疫学的所見が報告される主要な 1 つである。

MTF には、1975 年から 2021 年までの研究開始からの調査結果、すなわち 47 の全国学校内調査と 45 の全国フォローアップ調査の結果が含まれている。MTF は、1975 年から毎年(a)12 年生の生徒を対象に、また(b)1991 年から毎年 8 年生と 10 年生の全国を代表するサンプルの学校内調査を実施している。さらに、1976 年のクラスから、この研究では、以前に参加した各 12 年生のクラスの回答者の代表的なサブサンプルのフォローアップ調査を実施した。これらのフォローアップ調査は現在、成人期（現在 60 歳）まで継続している。

2021 年調査結果で得られた知見

<2021 年、薬物使用の広範かつ大きな減少がみられた。>

ほとんどの形態の薬物使用が 2021 年に急激で非定型的な減少を示した。

・違法薬物全体の使用は、急激な減少を示している。

3 つの学年を合わせてみると、2021 年、違法薬物使用の生涯経験率は 7.8% ポイント減少し、年経験率は 7.4% ポイント減少した。どちらも $p < .001$ レベルで有意であった。

これらは、2020 年の経験率レベルからわずか 1 年で 22% と 27% の相対的な減少に相当する。

・マリファナ（大麻）を除く違法薬物使用は、急激な減少を示している。

マリファナ以外の違法薬物の使用の減少は 4.2% ポイントと 3.6% ポイントであった。（前年比 22%、29% 減）3 つの学年を合わせたこれらの 1 年間の大幅な減少は $p < .001$ レベルで有意である。この傾向は、単年では、実質的かつ前例のない減少である。実際、これらの減少は 47 年の研究歴史のなかでの最大かつ最も広範囲のものである。

・マリファナ（大麻）の使用は、急激な減少を示している。

違法薬物の中で最も蔓延しているマリファナは、2021 年に 3 つの学年を合わせた生涯経験率および年経験率がそれぞれ 7.1% ポイントと 6.7% ポイントの大幅な減少を示し、30 日間の経験率（月経験率）では 3.6% ポイントの減少し、すべて $p < .001$ レベルで有意であった。2020 年から 2021 年にかけてのこれらの減少は、3 つの経験率レベルについてそれぞれ 24%、27%、および 25% の相対的減少に相当する。

過去 30 日間のマリファナの毎日の使用も大幅に減少し、3 つの学年を合わせた相対的な減少は 24% であった。2021 年の日経験率は、8 年生、10 年生、12 年生でそれぞれ 0.6%、3.2%、5.8% であった。

過去 12 ヶ月間の合成マリファナの使用（年経験率）も、3 つの学年を合わせてみると著しく減少し、2020 年の 2.2% から 2021 年の 1.6% に減少した ($p < .01$)。これは、27% の相対的な減少である。

次に、他の経験率の高い物質のいくつかに目を向けると：

・ Vaping は 2021 年に急激に減少している。

3 学年を合わせてみると、ニコチンベーピングは、27% である。これは、2020 年の調査において、調査研究対象としている物質ではアルコールを除くと、最も高い年経験率である。これは、2017 年に最初に追跡を開始して以来、その使用が極めて急速に増加していたことを反映している。（昨年報告したように、この上昇は 2020 年に 27% で止まった）。しかし、2021 年には、3 つの学年を合わせた年経験率は 7.9% ポイント低下し（相対的にみると 1 年間で 29% 減少）、年経験率は 19% になった ($p < .001$)。

ニコチンが非常に中毒性の高い物質であることを考えると、若年期から蒸気を吸う方法でのニコチン使用の増加は、1990 年代半ばから青少年の喫煙を追跡し、苦労して獲得した進歩（成果：喫煙率の低下）に深刻な脅威をもたらすものであった。したがって、2021 年において、ニコチン蒸気を吸入の減少は、特にそれが将来にわたって保持されるのなら、Covid-19 パンデミックのまれな肯定的な側面であるかもしれない。

JUUL ブランドの蒸気吸入機器はニコチン蒸気吸入市場で支配的であったので、2019 年に MTF では、JUUL に特有の質問を導入した。3 つの学年を合わせた 30 日間の経験率（月経験率）は、予想通り 2019 年に高かったが、2020 年には 3 学年すべてで大幅に低下した。その後、2021 年には、3 つの学年を合わせた 30 日間の経験率が 5.6% ポイントの有意の、さらなる低下が観察され、相対的な減少は 54% ($p < .001$ レベルで有意) であった。

JUUL は 2018 年 10 月にタバコとメントール以外のフレーバーの販売を停止し、青少年の JUUL ブランドの使用が劇的に減少した。しかし、全体的なニコチン蒸気吸入レベルは同じ程度には低下しなかった。これは、青少年が代わりにミントやフルーツフレーバーなどの若者に魅力的なフレーバーを提供し続けている Puff Bar などの他のブランドを使用するようになったためである。

また、蒸気吸入マリファナは、3つの学年を合わせた年経験率が急速に伸び、最初に調査された2017年の7%から2020年には16%に上昇した。しかし、2021年には、3つの学年を合わせてみると、4.7%ポイントの急激な減少が見られた(これは、2020年からの相対的な減少を反映して29%減、 $p<.01$)。(30日間の経験率(月経験率)の低下も $p<.001$ で有意であった)。

・コカインの使用は、2021年に減少している。

コカインの使用は2021年に減少し、コカインは3つの学年を合わせた年経験率は57%($p<.001$)相対的に減少した。2021年の年経験率は0.7%、2020年の1.4%から減少した。

・医師の監督外でのアンフェタミン使用の年経験率は2021年減少している。

医師の監督外でのアンフェタミン使用の年経験率は2013年以来減少しており、2021年には3つの学年を合わせてみると、2.7%($p<.001$)に1.9%ポイント減少した。これは2020年から2021年の1年間で41%の相対的な減少したことを示している。

・クリスタルメタンフェタミン(結晶型覚せい剤)使用の変化は小さい。

クリスタルメタンフェタミンは、2019年から2020年の間に、それを質問する唯一の学年である12年生で0.6%から0.0%に大幅に減少したが、2021年には0.4%に部分的に回復した($p<.05$)。

・医師の監督外での精神安定剤使用は、2021年に低下している。

2020年から2021年の間に、3つの学年を合わせてみた場合の、医師の監督外での精神安定剤使用の年経験率は2.7%から1.2%($p<.001$)に低下した。

<2021年に使用が増加した薬物はほとんどない。>

2021年に観察された数少ない増加の1つは、少なくとも8年生でADHDの治療のための薬物の使用であった。治療のためのADHD 30日間の経験率(月経験率)は2020年の2.7%から2021年には5.5%に2倍以上に増加し(有意に増加)、生涯使用もこの期間に7.3%から11.5%に増加した(これも有意に増加した)。この理由としては、パンデミック中に青少年がより多くのストレスに曝されていたため、パンデミック中に治療の必要性が高まったことが考えられる。もう一つの可能性は、パンデミックの間に自宅に籠ることによって青少年の注意の問題(ストレス)が両親にとってより見えやすかったと考えられる。

・一部の薬物は 2021 年にはほとんど変化がなかった。

2021 年に年経験率に大きな変化を示さなかつた薬物について、3 つの学年を合わせてみると、吸入剤、LSD 以外の幻覚剤、クラックコカイン、ヘロイン、オキシコンチン、ビコジン、リタリン、および溶解可能な（可溶性）タバコ製品がある。

・精神療法薬 の非医療的使用（乱用）は 2021 年減少している。

医師の監督外での精神療法薬の使用は、2000 年代の米国の薬物問題全体の重要な部分として特別な注意を払う必要があった。これは、その期間に多くの処方薬の非医療的使用が増加したことと、1990 年代半ばから後半にかけてストリートドラッグの多くの使用が大幅に減少したという事実によるものである。

青少年は、これらの処方薬が正当な目的のために広く使用されているため、医療処方以外で使用することの危険性についてあまり心配していないようである。（実際、12 年生の間で観察された鎮静剤およびアンフェタミンリスクのリスクに関する認識レベルが低い事実は、この点を例示している）。また、多くの処方精神療法薬は現在、米国では消費者に直接宣伝されている。これはこの種の医薬品が広く使用されており、安全であることを伝えるものである。

幸いなことに、青少年によるこれらの薬物のほとんどの使用は減少している。前年にこれらの処方薬（アンフェタミン、鎮静剤、精神安定剤、ヘロイン以外の麻薬）を誤用した 12 年生の割合は、2021 年も減少を続け、3.1% ポイント ($p < .001$) から 4.4% に低下し、この指標は、最初に計算された 2005 年の 17% から非常に大幅に減少した。2020 年から 2021 年にかけての相対的な減少は 41% であった。

・医師の指示のないヘロイン以外の麻薬の使用は 2021 年、減少している。

医師の指示なしにヘロイン以外の麻薬の使用（12 年生のみ調査）は、年経験率が 9.2% であった 2009 年以降、減少を続けた。2021 年には 1.1% ポイントの大変な年間の下落（2020 年から 52% の相対的減少、 $p < .01$ ）の後、1.0% となった。

高齢者における麻薬乱用の蔓延と、それに伴う医学的緊急事態および過剰摂取による死亡の増加を考えると、青少年がこれらの薬物の使用から遠ざかっていることは特に良いニュースである。青少年期にこれらの薬物を使用することに起因する悲劇・帰結に対しての脆弱性を低くするだけでなく、成人となる 20 代、30 代、そして 30 代以上 – 過剰摂取による死亡が現在最も蔓延している年齢一に、彼らがより慎重な行動を続ける可能性があるからである。言い換えれば、良いコホート効果が現れるかもしれない。

・飲酒（アルコール使用）は、2021 年に減少している。

アルコール使用の漸進的かつ長期的な減少は2021年まで続き、これはこの研究によってこれまでに記録されたアルコール使用の最低レベルをマークした。3つの学年を合わせた年間経験率は2020年から2021年にかけて8.1%ポイント低下して30.2%($p<.001$)、30日間の経験率（月経験率）は5.8%ポイント低下して15.1%($p<.001$)となった。

・喫煙（シガレットたばこの使用）のいくつかの形態は減少し続けている。

たばこ（シガレット）の喫煙は、1990年代半ば以来、長期間、極めて大幅に減少している。2021年までを3つの学年を合わせてみると、タバコ使用の30日間の経験率（月経験率）は92%減少した。1990年代のピーク以来、毎日の喫煙経験率は94%減少し、現在（調査時点）のハーフパックの1日あたりの喫煙率は87%減少した。長期の大きな減少にもかかわらず、2020年から2021年の間にはさらに減少し、30日間の喫煙率（月喫煙率）は8、10、12学年でそれぞれ、1.0、1.4、および3.4%ポイント低下した。これらは、それぞれ48%、44%、45%の大きな年間相対的減少を示している。この減少は、8年生で $p<.05$ 、10年生で $p<.01$ と有意であり、12年生の変化は有意ではない。Covid-19パンデミック中の学生生活の変化は、間違いなくこれらの急激な喫煙減少に役割を果たした。喫煙に対して一貫して観察されてきている強いコホート効果を考えると、8年生、10年生、および12年生のより喫煙の少ないコホートが年齢を重ねるにつれて、後の年齢での喫煙が引き続き減少を示すと予想される。

・2021年、たばこの使用開始は長期的かつ極めて重要な減少を続けている。

生涯経験率は3つの学年すべてで4.5、3.9、および6.1パーセントポイントと著しく低下し、8学年では($p<.01$)、10学年では($p<.001$)と有意に低下した。喫煙開始の長期的な減少は、現在喫煙の大幅な減少の重要な理由である。

青少年のCigarillos（小型葉巻としても知られている）の使用は、2021年に減少し続けた。12年生の年経験率は、2010年の23%から2021年には3.4%に低下した。通常の小型葉巻の年経験率も、2014年から2021年に最初に測定されて以来、8年生で2.5%から0.8%、10年生で4.4%から1.2%、12年生で7.0%から1.8%に劇的に減少した。注目しなければならないのは、減少しているが、青少年期の小型葉巻のユーザーの大半がフレーバー葉巻を吸うという事実である。

Hookah（水ギセル）を使うたばこ吸引の年経験率は、12年生では2014年まで増加し、2014年には23%に達したが、その後は一貫して減少している。2021年には、2014年の最高値である23%から相対的に86%減少し、2.1%であった。

1990年代半ばから2000年代初頭にかけて、無煙たばこの使用は大幅に減少したが、2000年代半ばから2010年にかけてわずかな回復が生じた。8年生と10年生は数年間、幾分低下した後横ばいだったが、12年生は2010年から2015年頃まで横ばいだった。近年、高学年では無煙たばこ経験率が大幅に低下した。2019年から2021年の間に、Covid-19パ

ンデミックの影響を反映して、すべての学年で低下した。

<COVID-19 パンデミック中の青少年の薬物使用>

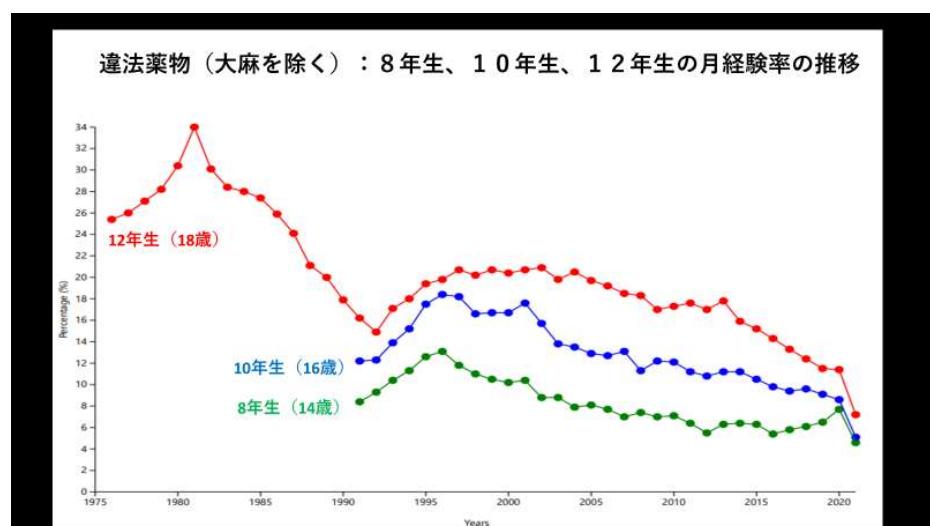
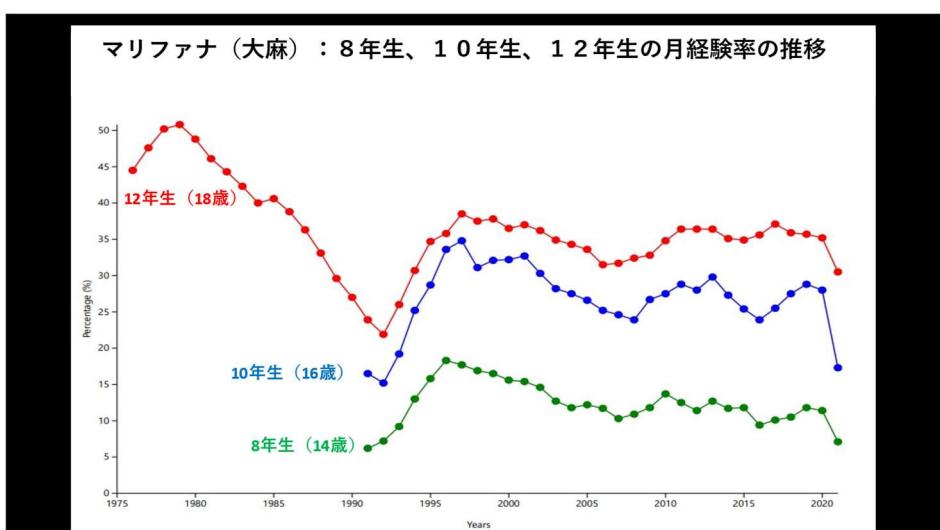
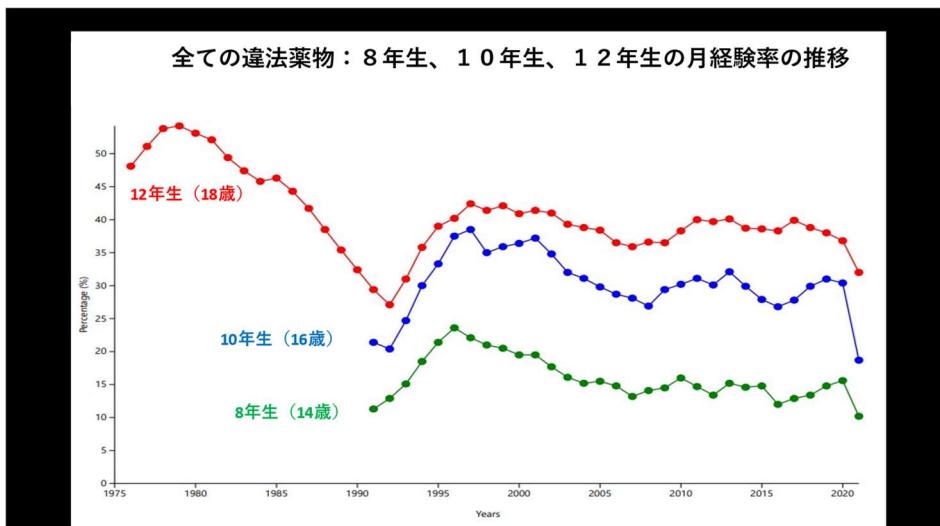
2021年に異常な減少を示した薬物の数を考えると、COVID-19 パンデミックは米国の青少年のほぼすべての種類の物質使用（薬物乱用）に大きな影響を与えたようである。これは、薬物使用の傾向を示す多くのグラフから視覚的に見ることができる。MTF2021 年調査では多くの大規模で記録的な減少をみることができる。

2021 年に物質使用量の減少をもたらすために何が変わったのでだろうか？

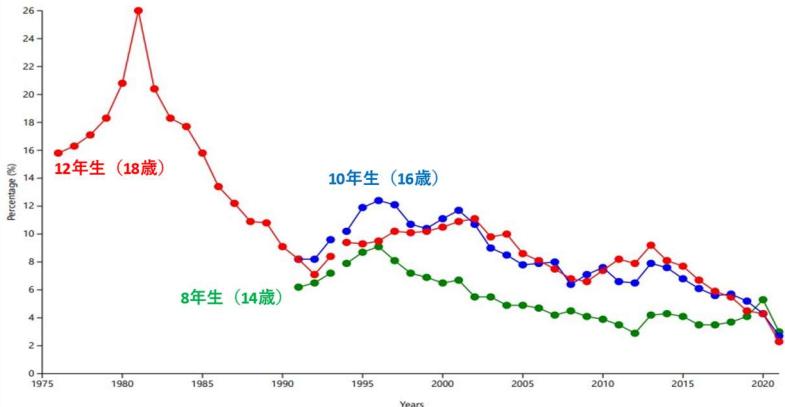
潜在的な要因は、危険についての認識、個人的な不承認・拒否的態度、および薬物入手の可用性が同時に変化したものと考えられる。特に、薬物入手の可能性の変化が大きな役割を果たしているように思われる。これは、特に Covid-19 パンデミック中の青少年の生活の変化を考えると、理にかなうものである。多くは学校に通っておらず、何人かは自宅でロックダウンされ、ウィークデイには自分の行動を監視することができる親が家にいた可能性が高く、多くは友人や他の十代の若者と交流しないように言われていた。

http://www.monitoringthefuture.org/pubs/monographs/mtf-vol1_2021.pdf

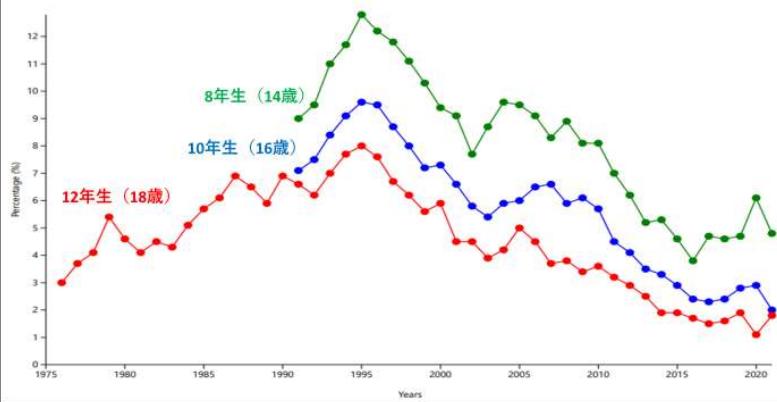
より 勝野眞吾の責任で翻訳・要約した。



覚せい剤（アンフェタミン）：8年生、10年生、12年生の月経験率の推移



有機溶剤（シンナー等）：8年生、10年生、12年生の月経験率の推移



ヘロイン：8年生、10年生、12年生の月経験率の推移

